東京古田会ニュース

－古田武彦と古代史を研究する会－　No.222 May.2025

http:// tokyo-furutakai.com/　　e-Mail: saitaka7078@yahoo.co.jp

代　表：安彦　克己

編集発行：事務局　〒212-0024　川崎市幸区塚越3-370　斎藤　隆雄　TEL/FAX 044-522-7500

郵便振替口座　００１１０－１－９３０８０　　年会費　４千円

口座名義　古田武彦と古代史を研究する会

目　次

＊「邪馬台国」七万余戸は本当か？
日野市　橘髙　修……①

＊倭人伝「七万余戸」の考察
―人口推計学の限界―
京都市　古賀達也……③

＊「語部」と「語部録」in
「和田家文書」　その１
愛媛市　皆川恵子……⑥

＊古代史コラム　Ｎｏ．３
「海原」考　続編
世田谷区　國枝　浩……⑨

＊和田家文書備忘録　第12回
「神風史観」　港区　安彦克己……⑪

＊倭国の遣使先とその遣使姿勢
―「対等外交」の真実―
世田谷区　國枝　浩……⑬

＊コーヒーブレーク
国立科学博物館 DNA 展見学会報告
千葉市　倉沢良典……⑰

＊古代史エッセー　８５
「倭国」、「女王国」、「邪馬壹国」
日野市　橘髙　修……⑱

＊「東京古田会」月例会報告⑪
文責：新保……⑲

「邪馬台国」七万余戸は本当か？

日野市　橘髙　修

はじめに

魏志倭人伝に記載されている戸数は、「対海国千余戸」、「一大国約三千家」、「末盧国四千余戸」、「伊都国千余戸」、「奴国二万余戸」、「不弥国千余家」、「投馬国五万余戸」、「邪馬壹国七万余戸」。女王国に約三十国あるうちの上記八国で合計が十四万六千戸＋四千家＋「余」です。戸と家の違いは不明ですが、同じだと仮定すれば十五万戸以上が記載されています。さらにそれ以外の旁国二十一国内にそれぞれ千戸ずつあると仮定しても十七万戸以上で女王国を構成していることになります。『三国志』魏書の烏丸・鮮卑・東夷伝に記された戸数を見ると、強国である高句麗の戸数が「三万戸」と記されています。女王国全体で高句麗の３倍以上の戸数があることになるわけです。ここでは魏志倭人伝の記載がなぜこのようになったかを探っていきたいと思います。

1.『三国志』烏丸・鮮卑・東夷伝に記された戸数・家数

『三国志』烏丸・鮮卑・東夷伝に記されている各国の戸数を抜き出してみることにします。

〈烏丸伝〉

烏丸は一つの部族が数百から千の「落」からなっています。「落」は烏丸最少の社会組織。２，３戸からなり、２０数人ほどの集団です。「邑落」は二十数戸からなり、約百数十人で構成されています。後漢（25～220 年）の末年、大人丘力居は五千余の「落」を、大人難楼は九千余の「落」を、大人蘇僕延は千余の「落」を、大人烏延は八百余の「落」を配下においてそれぞれが王となったことが記されています。

記されているだけで１万５千８百の「落」の数になります。一つの「落」がおよそ２・５戸からなるとすると、烏丸の戸数は約４万戸ということになりそうです。

〈鮮卑伝〉

鮮卑伝には、後漢順帝（在位：125～144 年）の時代、鮮卑の降伏三万余「落」、残された部族十余万「落」と記されています。合計１３万「落」、すなわち３２万５千戸になります。

〈東夷伝〉

夫余　戸数八万（その範囲は約二千里）東夷の地域の内では最も広々している。

高句麗　戸数三万（その領域は二千里ばかり）

東沃沮　戸数五千（約千里）

挹婁　不明

濊　戸数二万

馬韓　全部で五十余国　大きな国は一万余家　小さな国は数千家　合計十余万戸

辰韓　不明

弁辰　全部で二十四国、大きな国は四、五千家　小さな国は六、七百家　合計四、五万戸

〈倭人条〉

対海国　戸数千余戸　方四百里

一大国　戸数三千余家　方三百里

末盧国　戸数四千余戸

伊都国　戸数千余戸

奴国　戸数二万余戸

不弥国　戸数千余家

投馬国　戸数五万余戸

「邪馬台国」　戸数七万余戸

【考察】

『三国志』の烏丸・鮮卑・東夷伝に記された戸数・家数を書き出してみました。烏丸・鮮卑伝と東夷伝には、倭人条を除いて内乱や各国間の戦争が頻繁に起こっている様子が描かれています。それぞれの記述は国内の勢力争いなども含めて詳細です。国内の戸数や人口についても戦力と関係することなので正確でなければなりません。これらの国の一覧を見ると、鮮卑は後漢の順帝（在位：125～144年）の頃に「鮮卑の降伏三万余落、残された部族十余万落」とあり、上記したように戸数は３２万５千戸と推定されます。烏丸・鮮卑・東夷伝に記された国の中では圧倒的に大きい戸数を有しています。

東夷伝の中では馬韓の十余万戸が最大で、夫余の八万戸が続きます。夫余は「東夷の地域の内では最も広々している。」と記されているので戸数が多いこともうなずけます。高句麗は三万戸と記されていますが、後漢の時代から中国に対して抵抗を繰り返す強国として記されています。

倭人の国の中では奴国の二万戸、投馬国の五万戸、「邪馬台国」の七万戸が多く、この三国だけで１４万戸となります。倭人条には女王国には約３０国があるとされているので、女王国全体で十七万戸以上になることは前述のとおりです。１戸当たり５人とすると、女王国の人口は８０～１００万人になりそうです。弥生時代末期（200 年ごろ）の人口が６０万人程度という研究がありますが（鬼頭宏『図説人口で見る日本史』）、大きく相違しています。倭人伝によると、倭人は女王国以外にも、女王国と争うほどの勢力がある狗奴国や、海を隔てたところに倭種が住んでいると記されているので、２００万人に迫る人口になり、鬼頭氏らの研究とはかなり隔たりが多くなってしまいます。魏志倭人伝において戸数が突出している奴国の二万戸、投馬国の五万戸、「邪馬台国」の七万戸についてはにわかに肯定することはできないと言わざるを得ません。

【烏丸・鮮卑・東夷伝の戸数・家数ランキング】

わかりやすく比較するために、烏丸・鮮卑・東夷伝に記された戸数・家数をランキングにしてみました。この中で日本列島の「邪馬台国」、投馬国、奴国は女王国に属する国なので、本来ならば上記したように女王国の推計戸数である１７万余戸を対象としなければなりませんが、ここでは比較する基準の違いは認識したうえで、烏丸・鮮卑・東夷伝に記された戸数・家数を表示することにしました。

第１位　**鮮卑**　３３万戸
第２位　**馬韓**　１０余万戸
第３位　**夫余**　８万戸
第４位　**「邪馬台国」**　７万余戸
第５位　**投馬国**　５万余戸
第６位　**弁辰**　４～５万戸
第７位　**烏丸**　４万戸
第８位　**高句麗**　３万戸
第９位　**奴国**　２万余戸
第１０位　**濊**　２万戸

【考察】

鮮卑は中国歴代王朝に対して常に脅威となる勢力で、３３万戸にもなる戸数を引き連れて移動していたようです。馬韓は朝鮮半島西部に１０余万戸、夫余は高句麗の北方に８万戸と記されています。高句麗は韓半島の東北部に３万戸、この後北側に接している夫余の地に侵攻して勢力を伸ばしていくことになります。

それにしても、女王国連合の１国にすぎない「邪馬台国」が７万余戸、投馬国が５万余戸と高句麗以上の戸数を有していると記されていることには疑問を感じざるをえません。弥生時代の女王国が鮮卑、夫余と並ぶ東アジア第２、第３の勢力だったことになってしまいますが、そのようなことを示す史料は管見の限りでは存在しません。

２．「夷人不知里数、但計以日」

【南至邪馬壹國　女王之所都　水行十日陸行一月】

女王国の中で、その戸数が五万余戸とされる投馬国と七万余戸とされる「邪馬台国」の記述には他の国とは異なった共通点があります。帯方郡から「邪馬台国」までの行程記事は、不弥国までの各国間の距離表示はすべて「里」を単位としていますが、不弥国以降投馬国あるいは「邪馬台国」までの行程は「水行二十日」、「水行十日陸行一月」と経過日数で表示されています。書き分けられていること

には何らかの理由があるはずです。

【倭人は里程を知らなかった】

『隋書』俀国伝には、魏の時代に「夷人不知里数、但計以日」と記されています。「夷人」は「倭人」のことと解釈できます。この記事と倭人伝の記事を合わせると、倭人伝において里数で記されている部分は帯方郡使が実際に訪れた場所で自らの足で里程を確認していますが、日数で記されている投馬国と「邪馬台国」までの行程は倭人からの伝聞であると解釈することができそうです。

行程ばかりではなく、同箇所に記されている戸数の「五万余戸」、「七万余戸」も倭人からの伝聞である可能性が強いと考えられます。帯方郡使が実際に確認した上で記した里程表示と戸数、投馬国及び「邪馬台国」までの日数表示と戸数、両者の間には情報源の大きな違いがある可能性が極めて高いと考えざるをえません。投馬国に関する「水行二十日、五万余戸」と「邪馬台国」に関する「水行十日陸行一月、七万余戸」については慎重な史料批判を行う必要があるのではないでしょうか。

まとめ

1. 烏丸・鮮卑・東夷伝の中で、倭国の一国である「邪馬台国」の7万戸は他の諸国に比較して突出していること。
2. 1戸当たりの人数を5名とすると「邪馬台国」の人口は35万人、倭国全体17万戸では85万人になります。日本列島には倭国以外にも倭人は多数存在しているので、AD200年の遺跡数を基準にした日本列島の推計人口約60万人をはるかに超えてしまうこと。
3. 「邪馬台国」までの行程が不弥国までと異なり「水行十日陸行一月」と所要日数で記されており里数を知らない倭人（隋書俀国伝）からの伝聞であると考えられること。

以上の3点から、「邪馬台国」7万戸は「本当ではない」と判断しました。

倭人伝「七万余戸」の考察
―人口推計学の限界―

京都市　古賀達也

一、はじめに

八王子セミナーの実行委員として、橘高修さん（東京古田会副会長）と意見交換する機会に恵まれました。きっかけは『三国志』魏志倭人伝に記された邪馬壹国の人口記事「七万余戸」の信頼性についての橘高さんの疑問でした。倭人伝の当該記事は次のようです。

「南至邪馬壹國、女王之所都。水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸。」

一戸当たりの人数がどれくらいかはわかりませんが、仮に五～一〇人であれば「七万余戸」の邪馬壹国の人口は三五～七〇万人になります。

橘高さんから教えていただいた鬼頭宏氏の人口推計によると（注①）、弥生時代の日本列島の人口（北海道・沖縄を除く）は約六〇万人とのことで、その推計が正しければ「七万余戸」という倭人伝の記事は誇張されたもので信頼できないことになります。また、弥生時代に戸籍制度があったとは思われないことも、この「七万余戸」という史料事実を歴史事実とはできない理由になります。

他方、文献史学の立場（学問の方法・性格）からすれば、確たる根拠もなく、〝現代人の認識とあわない〟という理由で史料事実を否定・原文改定してはならず、まずは書かれてあるとおりに古代中国人（『三国志』の著者、陳寿と当時の読者）の認識として理解しておくことになります。そのうえで、史料事実とは大きく隔たる現代人による人口推計値約六〇万人が、どの程度確かな方法や理論により成立しているのかを確認する作業が必要です。更に邪馬壹国時代に戸籍があったのか、当時の一戸は何人くらいなのかという調査も必要です。

今回、「七万余戸」という倭人伝の記事に対して、学界ではどのような見解が発表されてきたのかについて調べたところ、誇張された数値で信頼できないとする論考があることを知りました（注②）。

二、弥生時代に戸籍はあったか

倭人伝に記された邪馬壹国の「七万余戸」という数字は誇張されたもので信頼できないとする理由の一つに、「弥生時代に戸籍制度があったとは思われない」という意見があります。他方、中国の影響を受けて、その時代にふさわしい制度が倭国にあったとする意見もあります。わたしは後者の意見に賛成ですが、当時の倭国の戸制度の内容は未詳です。しかし倭人伝には次の記事があり、注目されます。

「尊卑、各有差序、足相臣服。收租賦、有邸閣。國國有市、交易有無、使大倭監之。」

「租賦を収む」とあるように、「租賦」(祖は穀物、賦は労役と考えられている。**注③**)を徴収する制度が記されていることから、徴税・徴発のためには戸籍が必要です。特に労役や徴兵のためには、人口や年齢・男女構成などの把握が不可欠ですから、吉野ヶ里遺跡や比恵那珂遺跡群(福岡市博多区)のような大規模集落、弥生時代最大級の都市遺構の存在を見ても、それらを造営・維持管理するための国家制度(戸籍、官僚制度、軍事制度、官道・駅舎の管理制度など)があったことを疑えません。

戸制度については、古田武彦先生による考察が『倭人伝を徹底して読む』の「第七章 戸数問題」にあり(**注④**)、倭人伝に見える「戸」を「魏の制度としての戸」としています。同書には『漢書』地理志の戸数が列記されており、その一戸あたりの人数を計算すると、概ね四~五人であることがわかります。この数値を援用すれば、邪馬壹国の「七万余戸」は約三〇~三五万人となります。現在の福岡県の人口が約五一〇万人ですから、その六~七パーセントに相当します。これだけでも、人口推計学による弥生時代の推定人口(北海道・沖縄を除く)約六〇万人の半数ほどになりますから、両者は全く整合しません。

三、人口推計方法の限界

文献史学の視点からすれば、人口推計学の方法は本当に正しいのかという疑問を払拭できませんので、ネット上の緒論を調べてみました。それによれば、鬼頭宏氏の推定人口は小山修三氏の説(**注⑤**)に依拠しているとのことで、次のような説明と計算式が示されていました(**注⑥**)。

【以下、転載】

原典データは大略次のようなプロセスで人口を算出しています。

ア　日本でもっともふるく、かつ比較的信頼性のたかい人口データである沢田吾一(一九二七)の奈良時代人口(国別租税高による推算)を基準とする。

イ　沢田データに時間的に近い土師期(古墳、奈良、平安)遺跡数をもとめる。

ウ　データのそろう関東地方の遺跡当たり基準価Vを求める。

V＝P／T　遺跡当たり基準価(V)＝土師期の人口(P)／遺跡総数(T)

V＝九四三〇〇〇／五五四九≒一七〇

エ　縄文各期の人口は例えば

縄文中期人口＝縄文中期制限定数(C)×縄文中期遺跡数×V

でもとめる。

期別制限定数は結果蓋然性が高くなるような方法により早期一／二〇、前期一／七、中期一／七、後期一／七、晩期一／七、弥生一／三を設定する。(Shuzo Koyama 1979)

【転載おわり】

この人口推定に用いられた計算式が統計学的・論理的に妥当かどうか、わたしには判断できませんが、推定にあたり、各時代ごとの「遺跡数」が主要ファクターになっていることは明らかです。また、「期別制限定数」なるものも、恣意性が排除できない曖昧な数値のように見えます。

このような不確かな数値を採用して弥生時代の精確な人口を推定出来るのでしょうか。そもそも、各時代の「遺跡数」などわかるはずもありません。わかるのは「発見された遺跡の数」だけですし、遺跡の性格(人家・倉庫・工房・宮殿など)や規模(遺構の面積・容積)をどのようにサンプリング・カウントして、「定数」に反映させたのでしょうか。もし仮に計算式は論理的に正しかったとしても、このような不確かで曖昧な数値や定数を用いて縄文時代や弥生時代の人口を推定できるとは、わたしには思えません。そこで人口推定の専門家の論文を探しました。

近年では、小山氏の人口推計に問題があるとする研究者は少なからずいるようです。たとえば立命館大学に縄文時代の人口研究を専門とする中村大氏がいます。氏の論文「北海道南部・中央部における縄文時代から擦文時代までの地域別人口変動の推定」(**注⑦**)の「小山推定の意義と問題点」において、「計算方法に根本的な問題がある」として、計算に使用した遺跡数が「発見数」であり、「本当の存在数」ではないと指摘しています。これこそわたしが問題視したことの一つです。

このような根源的な問題点を持つ〝現代の研究者による弥生時代の人口推定値〟を根拠として、同時代史料である倭人伝の記事を否定するのは、文献史学の方法から見ても問題ではないでしょうか。現代人の認識によって、古代史料を原文改定・否定(たとえば倭人伝の中心国名「邪馬壹国」を「邪馬臺(台)国」に、その位置を示す方角「南」を「東」と書き換えるなど)するには、必要にして十分な論証が必要であると、古田先生が述べてきた通りです。ですから、まず疑うべきは同時代史料『三国志』の「七万余戸」よりも、問題があるとされる現代人による推定値(約六〇万人)の方ではないでしょうか。

四、戸数と面積の相関論(正木説)

弥生時代の人口推計学の方法(遺跡の「発見数」を計算に使用)や推定値(弥生時代の人口約六〇万人)に対して、同分野の研究者からも「計算方法に根本的な問題がある」との疑義が出されており、そのような推定値を根拠として、倭人伝の「七万余戸」を否定することはできないことがわかりました。

そこで倭人伝に記された各国の戸数とその領域の平野部面積に相関があり、その戸数が信頼できることを実証的に論じた正木裕さん(古田史学の会・事務局長)の研究「邪馬壹国の所在と魏使の行程」(注⑧)を紹介します。同研究の概要を説明した正木さんのメールを転載します。詳しくは『古代に真実を求めて』一七集に収録した正木論文をご参照下さい。

【以下、メールを転載】

古賀様

極めて大雑把な計算ですが、壱岐の面積と戸数をもとに計算した「魏志倭人伝」の各国の面積と領域は次のとおり。

❶壱岐(一大国)は一三八㎢・三千許(家)」の伊都国・不彌国両国の面積は1/3の各約五〇㎢。

(＊壱岐の耕地面積割合は1/3程度。怡土平野はほぼ耕地だからこれを一定考慮すれば両国は約二五㎢＝方五㎞の範囲の国)

❷「奴国」の「二万戸」を比例させれば約八〇〇㎢。これは山岳部(背振山脈)を除外すれば怡土平野＋肥前国程度。

❸「邪馬壹国」の「七万戸」を比例させれば約二八〇〇㎢。これは山岳部(古処馬見英彦山地)を除けば、南西は筑後川河口の有明海岸まで、南は耳納山地を含み、東は周防灘沿岸の豊前市付近まで、北東は直方平野から関門海峡までを包む領域で、邪馬壹国は筑前・筑後の大部分と豊前といった北部九州の主要地域をほとんど含んだ大国だったことになる。

つまり壱岐の戸数と面積をもとにすれば「七万戸」は北部九州、それも福岡県とその周辺に収まる「合理的な戸数」になります。

全国で六〇万人などという人口推計がおかしいのです。　正木

【転載おわり】

この正木さんの計算方法は誰でも検証可能なデータに基づいているため、恣意性を排除しやすく、説得力があります。「七万余戸」を信じられないとする論者は、この正木説への批判も必要となるでしょう。

五、五〇年逆行する畿内説

「邪馬台国」畿内説では、倭人伝に記された里数値や行程方角、戸数などを信頼できない(信じない、採用しなくてよい)とするのが大勢です。そこで、代表的な畿内説論者の仁藤敦史さんの著書・論文(注⑨)を読んでみました。その読後感は「倭人伝研究が古田武彦以前の状況、言わば五〇年逆行している」というものでした。ちなみに同様の感想を、古田学派の中でも中国史書・倭人伝研究に最も精通する谷本茂さん(古田史学の会・編集部、日本科学史学会・会員)も漏らしていました。

谷本さんは京都大学時代(工学部電気工学科)からの古田説支持者で、中国古典の天文算術書『周髀算経』の研究により、周代に短里(一里＝七六～七七m)が使用されていたことを明らかにした研究業績が著名です(注⑩)。その谷本さんから、仁藤さんら「邪馬台国」畿内説論者の倭人伝研究は「五〇年、時代に逆行している」と聞いていたのですが、実際に読んでみると、まさにその通りでした。併せて読んだ安本美典氏の著作『「邪馬台国＝畿内説」「箸墓＝卑弥呼の墓説」の虚妄を衝く!』(注⑪)の方が考古学エビデンスも解釈も、失礼ながら〝はるかにまとも〟と思えたほどです。

詳しくは別述しますが、古田先生や谷本さんが明らかにした魏・西晋朝短里説は、「邪馬台国」畿内説にとって最も不都合な仮説です。そのためか、仁藤さんや渡邉義浩さんの著書(注⑫)には、古田先生が五〇年前に提起し、当時論争が続いた短里説がなぜか全く扱われていません(注⑬)。

最後に、倭人伝中の戸や里単位について言及した古田先生の著書『邪馬一国への道標』(注⑭)の一文を紹介します。

「倭人伝中の里数値を漢代の里単位と同じ「単位」に解して、〝とんでもない錯覚〟の中に躍らされてきた、研究史上の苦い経験があります。たとえば、

○(韓)方四千里。　(魏志韓伝)

○郡(帯方郡治。ソウル付近)より女王国に至る、万二千余里　(魏志倭人伝)

を、〝大風呂敷だ〟と信じて疑わない「邪馬台国」論者がいまだに跡を絶たないのには、驚かされます。つまり、単位問題では、いつでも、〝その時代の単位の実体をまず確認する。

この手続きが不可欠なのです。〃」同書一〇七頁

「万二千余里」と同様に、「七万余戸」も当時の人口を推定する上で、〃その時代の単位の実体をまず確認する〃手続きが不可欠です。その上で、一戸四～五人が穏当であれば、弥生時代の人口推計における文献史学による参考値として取り扱うことが可能になると思われます。少なくとも、自説に不都合な史料事実を「信じられない」「信じない」として無視・否定するよりも、史料批判を介し、一字一句を真正面から検証することで、歴史の真実に迫れるものと思います(注⑮)。

最後に、人口推計について深く考えるきっかけを与えていただいた橘高さんの〃問いかけ〃に感謝します。

〔令和七年(二〇二五)四月二日、改稿筆了〕

(注)

①鬼頭宏『図説　人口で見る日本史』PHP出版、二〇〇七年。

②岡田英弘『倭国　東アジア世界の中で』中央公論新社、一九七七年。

③国営吉野ヶ里歴史公園HP「弥生ミュージアム　第五章　弥生時代の社会」の解説による。

④古田武彦『倭人伝を徹底して読む』大阪書籍、一九八七年。

⑤『ブログ歴史人口学』によれば、小山修三氏の説に依拠した鬼頭宏氏の推定人口は次のように説明されている。

遺跡数と、遺跡当たりの推定収容人口比から、弥生時代に関しては遺跡数に五六、中期以降の縄文時代に関しては遺跡数に二四、縄文時代早期に関しては遺跡数に八を乗じた値をそれぞれの時代の推定人口とすることで算出された。

縄文時代早期　二万一〇〇人
縄文時代前期　一〇万五五〇〇人
縄文時代中期　二六万一三〇〇人
縄文時代後期　一六万三〇〇人
縄文時代晩期　七万五八〇〇人
弥生時代　五九万四九〇〇人

http://houki.yonago-kodaisi.com/F-geo-Jinkou.html

⑥『ブログ花見川流域を歩く』「縄文時代人口データ原典の考察」二〇二〇年六月七日

https://hanamigawa2011.blogspot.com/2020/06/blog-post_7.html

⑦中村大「北海道南部・中央部における縄文時代から擦文時代までの地域別人口変動の推定」『令和元年度縄文文化特別研究報告書』函館市縄文文化交流センター、二〇一九年。

⑧正木裕「邪馬壹国の所在と魏使の行程」『古代に真実を求めて』一七集、明石書店、二〇一四年。

⑨仁藤敦史『卑弥呼と台与』山川出版社、二〇〇九年。

同「倭国の成立と東アジア」『岩波講座　日本歴史』第一巻、岩波書店、二〇一三年。

⑩谷本茂「中国最古の天文算術書『周髀算経』之事」『数理科学』No.一七七、一九七八年。

同「解説にかえて　魏志倭人伝と短里　―『周髀算経』の里単位―」、古田武彦『邪馬一国の証明』角川文庫、一九八〇年。

同「『邪馬一国の証明』復刻版解説」、古田武彦『邪馬一国の証明』ミネルヴァ書房、二〇一九年。

⑪安本美典『「邪馬台国＝畿内説」「箸墓＝卑弥呼の墓説」の虚妄を衝く!』宝島社新書、二〇〇九年。

⑫渡邉義浩『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書、二〇一〇年。

⑬古田武彦『「邪馬台国」はなかった―解読された倭人伝の謎―』朝日新聞社、一九七一年。ミネルヴァ書房より復刻。

古田武彦・谷本茂『古代史の「ゆがみ」を正す　「短里」でよみがえる古典』新泉社、一九九四年。

⑭古田武彦『邪馬一国への道標』講談社、一九七八年。

⑮古田武彦『失われた九州王朝』(朝日新聞社、一九七二年)序文に次の一節がある。

「〃陳寿を信じとおす〃わたしは、前の本の序文でそう言った。陳寿は『三国志』の著者である。わたしの用法では、〃信じる〃とは〃盲信する〃の反対語だ。『三国志』に真正面から立ち向かい、その一字一句、綿密に調べ抜く。そして、科学的に実証することなしに安易な「原文改定」を行わない。――これが〃陳寿を信じる〃わたしの立場だった。

だから、この研究方法はそのまま『三国志』以外の中国史書に対するわたしの立場である。『後漢書』『宋書』『隋書』『旧唐書』、それらの語る倭国像に対し、わたしは耳を傾けつくそうとしたのである。」

「語部」と「語部録」in「和田家文書」その1

愛媛市　皆川恵子

「和田家文書」に頻出する「語部」「語部録」という言葉は何か優しい懐かしい響きがある。ずいぶん前に読んだネイティブアメリカン、イロコイ族の系譜をひくポーラ・アンダーウッド氏の『一万年の旅路：ネイティブアメリカンの口承史』(THE

WALKING PEOPLE 翔泳社／1998 年）を思い出し、口伝史（ORAL HISTORY）の確かさを再確認することになった。「1万年間語り継がれたモンゴロイドの大いなる旅路」著者は「1932 年、ロサンゼルス生まれ。幼年期より父についてアメリカ北東部の先住民に伝わった長大な口承史を学び、思春期までに正式な継承者となる。大学で国際情勢論を専攻した後…42 歳で口承史の英訳出版という本来の役目に戻り現在までに3冊の著書と多数の記事を発表している。」

「和田家文書」の「語部」は父親に幼い時から代々伝わる口伝を叩き込まれ、弘前市の玉川宏氏によると約８０００の話を記憶していたと言われている。「語部録」が伝える丑寅日本の歴史とは？語部の大いなる旅路を辿ってみたい。

Ⅰ.「他見無用、門外不出」

史料１. 丑寅日本国古代記抄 語部録 参（ガコカムイ伝 『和田家文書コレクション』）

「注要戒

此の書は他見無用、門外不出と心得よ。語部録は現世襲に染まず、世に示しては科を被るなり。

寛政五年（1793 年）六月 秋田孝季

序言

本巻は失なはれ逝く丑寅日本国の古事を、語部録を譯して綴りたるものなり。依て、倭史に基く史談の一行も記す事になかりき物語なり。古来、永きに渡りて丑寅日本史の出芽なく、常にして欠かるのみなり。依て、古代より祖人が遺しける語部録を綴りて、本巻の永代保存を志して編纂し置くものなり。

寛政五年七月一日 秋田孝季」

「和田家文書」の各巻の始めに必ず「此の書は他見無用、門外不出と心得よ」の文言が記されている。なぜなら時の政権に不都合な真実が述べられており、世に出れば一族皆殺しという科を被ることになる。先祖代々伝えてきた語部録の「永代保存を志して編纂」し語部録を守り抜くという強い意志を各巻の巻頭に示している。天明五年（1785 年）の三春藩大火災で藩の御文庫が焼失し、先祖代々伝来された古書がことごとく失われ、藩主秋田千季（ゆきすえ）は義理の子息秋田孝季に日本中に遺る安倍・安東・秋田氏関係の歴史を収集するよう命じ、藩政の重大課題とした。秋田孝季（たかすえ）は和田長三郎吉次（よしつぐ）とともに30 余年にわたって全国を回り、３０００巻近い史料集（巻子、冊子）にまとめ清書したものを三春藩に献上している。しかしこれは無念にも再度放火され消失。戦後にようやく出版された「和田家文書」は、和田長三郎吉次の手元に残っていた清書前の史料である。孝季は未来に希望をたくし、和田家文書を公開できる時が来るまで和田家が代々書写してこの文書を遺すようにと、「注要戒」に願いを込めた。

史料２. 奥州尋問張紙 （『北鑑』第六巻）

「とかく奥州の史に審しては、倭史に基を置ける故に、その人住むる郷に無史の空白を生ぜるなり。東に於ては前九年の役、西にては後三年の役。更には二十五萬の攻手を挙したる平泉の乱にてことごとく失せにしは、陸羽になれる古事無史の域に閉したり。史に曰はしむるは、倭説に叶ふる史傳耳世に遺りて、古来なる奥州の来暦にあるはその語りにも科を蒙むる事ぞ暫々なり。依て茲に北鑑全六十巻を以てその故事を永代に遺すは、秋田氏の治藩・三春の當主なり。一つ眞實を求むるが故なる萬史の諸説。それなる砂の數より選釋せるは、私にして神ならず。誠の天秤に裁を以て断定は難し。故に玉石混合と雖ども諸説を集綴なして、その判断を衆視の聖に委ぬものなり。茲に羅列せる傳説をして、私をして除くは不為行為なり。道に支派あり。學にも専門にして修道あり。一人の頭脳をして萬能ならしむは、能はざる叶事なり。依て茲にその選抜をして私考とせざる綴りに當然なる尋史の記述ぞ諸説を張紙のまゝに尋的にさらしなん。

寛政五年八月一日 秋田孝季」

倭国の歴史に合致しない奥州の歴史は除去され空白のままである。古来の奥州の歴史を語ると、しばしば科を蒙った。三春藩の当主秋田氏が奥州の古事を永代に遺すために、『北鑑全六十巻』を編纂した。一つの真実を求めるには多くの諸説が必要だ。玉石混合と言えども諸説を収集して衆人の目にさらし歴史の真実を求めたい。孝季の集史の基本姿勢である。

Ⅱ.「語部録」は「丑寅日本国史」

史料３. 諸翁聞取り帳 二（イシカカムイ伝 『和田家文書コレクション』）

「〇△一 ※〆ゟ」とは、古き世の古事を是の如き語印を以て遺し置きける、語部録と稱す丑寅日本国史なり。

此の国は、十五萬乃至参拾萬年前より人の住みける国にして、山靼より黄土嵐を脱し、此の国に渡来せる人祖をして肇められたる国なり。その民の最祖なるはアソベ族、次なるはツボケ族にして、子孫は西南に住分けを擴げたり。依て、古代なる神アラ

ハバキ信仰も諸国に遺りけるは、倭神のたぐいに非らざるを知り置くべし。

寶暦元年(1751 年)十二月木田己之吉」

「語部録」とは、丑寅日本国の歴史書であると明記する。『和田家文書』によれば、丑寅日本国の祖先は15 万年から30 万年前（注）に山靼から来たアソベ族である。次にツボケ族、そして彼らの子孫は西南に移動し住み分けしていった。全国にアラハバキ信仰の痕跡が広がっていることがその査証だ。倭国の神とは全く別物であるという主張が「和田家文書」の根幹となっている。

（注）中国・周口店遺跡の北京原人は、約25万年前から40 万年前に住んだとされる。

史料4．語部録譯（『和田家文書コレクション』）

「本書は、古代文字にして、草木葉皮及び獣皮に記したる古人の遺物より、古きことの由を写し置き、丑寅日本国の古事を記しけるものなり。丑寅日本国は、人祖をして、山靼より渡来し、此の国を日本国と號け、東の日の出なる海国とて、宇宙の總て、天なる總てをイシカカムイと崇めたり。

壬子猛春（1792 年）秋田孝季」

「語部録」は古代文字で木や獣の皮に古事が書かれたものを書写して保存してきたという。山靼から移住してきた祖先はこの国を「東に日の出なる」国ということで日本国と号した。そして宇宙と天をイシかカムイとして崇拝した。「日本国」という名称はかなり古いと考えられる。

史料5．日本國史（ひのもとのこくし）（奥州隠史大要二　『和田家文書コレクション』）

「非倭國日本國號、亦非日高見國別號、在丑寅日辺是號日本國亦日髙見國。来人祖山靼、東日流糠部爲日本中央。祖来山靼國住人多渡着、神祀以荒覇吐神爲一統。王政之一世耶靡堆王。阿毎氏之流裔安日彦王爲立君給也。

（倭国は日本国の号にあらず。亦日高見国の別号にもあらず。丑寅の日辺に在るが故に日本国、亦日高見国と号す。人祖は山靼より来たりて、東日流糠部を日本中央とす。祖来山靼国住人多く渡り着き、神祀は荒覇吐神をもって一統となす。王政の一世は耶靡堆王。阿毎氏の流裔安日彦王を立君なし給う也。文責皆川）

右は東日流語部録の筆頭也。その表題亦、日本國史とて明記せり。

依て、倭國がもとよりの日本國たる國號は、露も存在なきものなり。倭國とは、坂東の安倍川、越の糸魚川に東西の境せる西南を倭國とし、東北を日本國とせるは實相なり。

抑々、吾が國の古代をして王國の基をなしけるに、倭国にては、奇想天外なる神代たる神話に以て國の創とし、民心を洗脳しけるにや、信仰を異にせる荒覇吐神の明覚に、幻想を以て是を鬼神・外道の神とて、倭史に丑寅日本國をまつろわざる化外地の蝦夷と、代々にして民心を迷誘しける造話作説ぞ、いつ日か事破れむ。

元禄十年(1697 年)二月四日　藤井伊予」

「日本國」という国号は「丑寅の日辺に在るが故に日本国」と号した。倭国から日本と呼称を変えたのではない。「日本國」は「倭国」とは全く異なる別の国である。祖先は「山靼国住人」が多く渡来し、荒覇吐神信仰で統一されていた。坂東の安倍川、越の糸魚川を結ぶ東西を境として、南西を倭国、東北を日本国としたというのが真実である。「日本國」の王政の一世は耶靡堆王。その後阿毎氏の子孫安日彦王を立君した。これが「東日流語部録の筆頭」となっている。日本国は人が始めた国であると「語部録」に明記されているが、倭国は「奇想天外なる神代たる神話」を国の創りとしている。「語部録」は15 万年以前の祖先の渡来から始まる壮大な日本国の歴史書であると高らかに宣誓している。

史料6．語部異伝之事　（ホノリカムイ伝　『和田家文書コレクション』）

「丑寅日本国のなかに語部文字を讀むる者、その八種になる種字に覚つ者なく、神司の他に是を讀むを得ず、如何にしても倭人の智者をして解き難きなり。是、幸にして永代に古事を失ふるなく今に遺る寶典たり。語部録とは、かくして世々に遺る丑寅日本国史なり。祖々代々、是を害障さるゝなかりきは、丑寅民の代々に遺せむ法便安隠にして、如何なる世襲にも書續けられたりと曰ふ。語部録とは、是くして遺りきものなり。古代より、文字を得たる丑寅日本国の実在は、倭史を以て白行なれども、先進の程を知るべし。大王のもと民に税無く、何事も睦を以て身命を大事と尊重し、争ふを好まず安心立命を一義に、暮しを保つはまさに泰平の民たるなり。互に生々労拠し、神を信仰して迷信に惑はず、常にして子孫隆榮に代々爲し来たるはたのしき哉。

寛政甲寅年（1794 年）　秋田孝季」

語部録が生き残ったのは奇跡のような気が私（筆者）にはする。秋田孝季は、語部録は「永代に古事を失ふるなく今に遺る寶典」と最高の賛辞を贈る。語部文字は神司のみに伝わったもので、倭人の智者といえど読み

解くことができず、お目こぼしになり焼却されないで遺った。また、代々ずっと途切れることなく書き継がれてきたから遺ったのだ。丑寅日本国の住人は語部の価値を知っていた。日本書紀には丑寅日本国の事はほとんど記載されていないが、語部の伝える歴史は、その先進性を証明している。無税、命の尊重、争いを避け安心立命を第一義とした。労働と信仰により子孫繁栄して来た泰平の民である。

Ⅲ．語部は「六千年前より存在せし部の民」

史料７．東日流諸翁聞取帳二　（『和田家文書コレクション』）

「語部録を遺せし祖先代々は、世にある古事を、石に木にまたは獣皮に記したるものを集編綴りたるものなり。語部と曰ふは、部の民と曰ふ役目にて、丑寅日本国諸處にありて、子孫代々に傳へ来たりしものなりと曰ふ。

寛政甲寅年　秋田孝季」

史料８．荒覇吐神大要　（丑寅日本史総解　『和田家資料１』）

「抑々、丑寅日本國の語部に遺れる歴史の上なるは、十五萬年前に人祖は氷凍舟にて来たりと語部の語印に遺れり。語部ぞ、太古よりの歴史を傳ふる王がかかふる史家にして、六千年前より存在せし部の民なり。丑寅の日本國歴史の創に神代なるはなし。人祖の渡来を山靼にして故地と為し、これをブルハンの民と曰へり。丑寅日本國に定着せし人祖の子孫には阿曽辺族・津保化族・麁族・熟族・山靼族の五族が西南地に子孫を擴殖せりと曰ふ。」

史料９．語木語印に曰く（語邑帶川貞介所藏）（丑寅日本史総解　『和田家資料１』）

「あなとふきふることの、このくになりませる人の祖に曰さくは、十五萬年前の事にのぼりぬ。北西の海濤凍りてブルハンは渡りし國を流鬼嶋と曰ふ。更に海隔てる日髙國に氷凍舟にて渡り、東日流には筏にてたどり給ひき人の祖ぞ、ブルハンと曰しなん。

永承二年（1047 年）五月一日　ありまのかたりべ　とまのえかし」

「丑寅の日本國歴史の創に神代なるはなし。人祖の渡来を山靼にして故地と為し」という記述は理性的かつ合理的で、和田家文書を貫く精神となっている。語部は「部の民」という役目で、丑寅日本国のあちこちに、国王がかかえる「史家」として６０００年前から存在し、15 万年前からの言い伝えを語り継いできたと記されている。６０００年前に遡ると言われている三内丸山遺跡に、語部がいたことになる。

史料８の「語木語印」とは語印（語部文字）で記された木の板である。永承二年（1047）五月一日に「ありまのかたりべ　とまのえかし」がその文字を訳して遺したもので非常に貴重な史料である。弾圧を免れて語邑の帯川貞介が秘蔵していた語の木版（かたりのきまさ）に「遠い遠い昔の事　この国にたどり着いた祖先が言うことにや、それは 15 万年前にも遡る。北西の海が凍り、氷凍舟にてブルハンから凍った海を渡り流鬼嶋へ、また氷凍海を渡り日髙國へ、そして筏で東日流にたどり着いた。その祖先をブルハンと言う」と記している。15 万年前の出来事をなんとリアルに伝えていることか。ブルハンとはバイカル湖の名称である。

（以下次号に続きます）

古代史コラム No.３
「海原」考　続編

世田谷区　國枝　浩

山常には　群山あれど　とりよろう
天の香久山　のぼりたち　国見をすれば　国原は　煙たちたつ　海原は
鴎たちたつ　うましくにぞ　八間跡の国は　舒明天皇の歌とされる天の香久山歌（万葉第二歌）

「海原」について

1．万葉集の解説ではどのように解釈されているか

2．古語辞典はどういう意味を載せているのか

3．国語辞典はどういう意味を載せているのか

これらを調べて暫定的な結論を出したのが、東京古田会の２２１号の「「海原」考」だった。それを簡単にここでまとめておく。

一．「海原」が「池」も含むと最初に述べたのは

1．万葉の解釈

賀茂真淵が池をも「海原」に取り入れた。埴谷の池を海に見立てた、というのが始まりのようだ。国学者、藤原（鹿持）雅澄（１７９１～１８５８）の『万葉集古義』（没後の１８９１年出版）も埴安の池をさすと言う。現代でもそれを引き継ぐ万葉学者が多い。１９２７年の佐竹昭広他・岩波文庫『万葉集（一）』、

１９４８年の武田裕吉『万葉集全注釋』改造社。１９６０年の澤瀉久孝『万葉集新注』など。

「大阪湾の海が見えた」と言うの

は国学の契沖と富士谷御杖の『万葉集叢書』。この二名は暗黙裡に「海」は「池」であることを否定している。ただし、藤原雅澄は香久山から大阪湾は見えないと契沖を批判している。「海原」に池を取り入れている万葉集の解説書は、国学派の賀茂真淵、藤原雅澄から佐竹昭広らまで時代が跳んでいる。その間のものを私は見つけられなかった。

2．古語辞典

これに対して、古語辞典での「海」の取り込みは遅い。

１９６３年小学館の『古語大字典』初版　中田祝夫他が最も早く「池」を載せた。次いで、１９７４年岩波の『古語辞典』大野晋他、その後はすべての古語辞典に「池」が載る。１９２７年以後の万葉解説書とのかかわりがあるのだろうか。１９６３年の『古語大字典』初版に最も近い１９６０年の澤瀉久孝『万葉集新注』が古語編纂に与えた影響は大きかった可能性もある。いずれにしても、一種の「国学リバイバル」が古語の領域で起こっていた可能性がある。１９６０年代が一つの転機となっているようだ。不思議なことに澤瀉久孝は万葉歌解釈では「池」を含めたのに、筆頭編者を務めた１９６７年の三省堂『時代別国語大字典　上代編』（私は、この辞書は古語辞典とみなしている）には「池」は載っていない。他の編者たちの見解と折り合いがつかなかったのであろうか。

3．国語辞典

１９６７年の『広辞苑』第二版が国語辞典として初めて「海原」の項に「池」を載せた。ただし、出典に万葉歌の第二歌は挙げていない。出典は万葉巻五の第八六八歌、文字通り「海」の沖行く船を歌った歌、松浦佐用姫歌であった。これは、「海」の典拠にはなっても、「池」の典拠にはなっていない。新村出が根拠もなく、古語辞典に忖度したのだろうか。

しかし、国語辞典の転機も古語辞典を追いかける形で１９６０年代ということになる。『広辞苑』の影響は計り知れないほど大きいものだったと言えないだろうか。つまり、小学生向けの国語辞典の「海原」項には「池」は載らないが、それ以上の年代が使う国語辞典はほとんどが「池」を含めることになったからである。

とはいえ、よく見ると「海原＝池」は新村出の『広辞苑』と松村明が編集に関わる国語辞典類だけとも言える。松村明の関わる辞書は多い。『広辞苑』の影響力と共に、占める比重は大きそうだ。

以上が、前回の「海原」考の結果である。資料を含めて詳細は、東京古田会ニュースＮｏ．２２１の古代史コラム２・「海原」考」を参照のこと。

二・漢和辞典類を調べる

本節は、次の表を見ながら進める。

1．海は海

最近になって、東京古田会副会長の橘高修さんが拙稿：「海原」考」を読み、「海」について諸橋徹次などの漢和辞典は何を書いているのだろうと問題提起された。私は漢和辞典を見ていなかったと思い、急いで調べてみた。調べて驚いたことに、漢和辞典にも古語辞典、国語辞典と一種、似たような傾向があったのである。

１９７０年代から多くの漢和辞典が「海」の項に「大きな湖」を掲載するようになったのである。私が見た限りでは、「池」を載せたのは、鎌田正編集の『新漢語林』初版（大修館書店２００１年）のただ一点だけである。それ以前はどうか。

１９５９年の角川の『漢和中辞典』では「海」は「海」でしかない。焦点になる、諸橋徹次の『大漢和辞典』は出版年が１９６７年の縮冩版巻六第三刷のものである。ここでも「海」は「海」以外の何物でもない。

ところで、諸橋の『大漢和辞典』初版は１９５７年と早い。これを私は見ていないのだが、内容の変更がないだろうと想定している。したがって、そうはしなかったが諸橋のものを表の先頭に置いてもよかったであろう。というのも、古語辞典、国語辞典ともに、新しいものほど「池」、「湖」を含むものが多くなっていたからである。漢和辞典も新しいものほど「池」や「湖」を載せる傾向があるのではないだろうかと推測したからである。

発行年	辞書名	出版社	版	代表編者	すべてに海は載る。海以外の意味	
1959	漢和中辞典	角川	初版	貝塚茂樹	--------	--------
1967	大漢和辞典	大修館書店	初版1957	諸橋徹次	--------	--------
1978	大漢和字典	学研	初版	藤堂明保	大きな湖	北海（バイカル湖）
1988	漢字源	学研	初版	藤堂明保	大きな湖	北海（バイカル湖）
1999	新釈漢和	明治書院	新版十五版	吉田賢抗編	みずうみ	--------
2001	新漢語林	大修館書店	初版	鎌田正	池、湖	北海（バイカル湖）
2014	新漢語辞典	岩波書店	第三版	山口明穂	大きなみずうみ	青海、カスピ海
2017	漢字海	三省堂	第四版	戸川芳郎	大きな湖	北海（バイカル湖）
2023	漢辞典	旺文社	第４版	宇野茂彦	みずうみ	湖水

2. 海は大きな湖

これに対して、すぐ気が付くように１９７８年の藤堂明保、「漢和大字典」以降、ほとんどすべての漢和字典に「海」だけでなく「大きな湖」が載るようになってきた。藤堂の辞書が画期になったようだ。古語辞典、国語辞典に比べると反応は鈍かったと言えるだろうが。

藤堂の影響力の大きさは上の表からもわかる。右列に並ぶ「北海〔バイカル湖〕」が目につく。なんとも不可思議な記述である。北海は北大西洋の一部をなす海である。イギリス、ノルウェー、デンマーク、フランスなどに囲まれている。これ以外に北海があるのだろうか。これに対して、バイカル湖はロシアにある世界最大の水量を誇る湖である（注）。両者に何らかの関係があるような書き方をする意味は私にはわからない。さらにわからないのは、その藤堂を「丸写し」したような辞書が存在することである。これで、真面目に編集作業をしたと言えるのであろうか。執筆者・編集者だけでなく、出版社の姿勢が問われる問題ではないだろうか。

（注）黒海やカスピ海はバイカル湖より大きく内陸部にあるが、地中海繋がりの海水を含むために、多くは純粋に湖であるという扱いがなされていない。この意味で、バイカル湖が世界最大の湖と一般的には認定されている。

3. 辞書の編纂は客観性を持つのか

藤堂の影響力はもちろん大きいだろうが、藤堂の側にも周りを取り巻く言わば「古代史の通説」という環境が影響を与えたと考えられないだろうか。

率直に言うと、私は藤堂の辞書で古代の歴史に関する部分には信頼を寄せることはできないのである。なぜか。『倭国伝　中国正史に書かれた日本』（講談社学術文庫）という書物がある。藤堂明保・竹田晃・影山輝國による中国の史書に載る「倭国伝」の翻訳ものだ。

この書物の「序」の三頁に次のように記されている。誰でも読める「邪馬壱国」にわざわざルビを振り「ヤマイチコク」ではなく、「ヤマタイコク」と読んでいる、いや「読ませようとしている」。どういう目論見があってそうしたかは不明だ。

この本は２０１０年に第一刷発行となっている。藤堂は１９８５年に亡くなっているので、この訳本に直接タッチしていないであろう。藤堂が生前からそう読んでいたことも考えられる。しかし、「壱」を「タイ」と読むことを漢字専門の学者がするのだろうか。文字改変以上の「詐欺的な」振舞であろう。確認してみたのだが、もちろん藤堂の『漢和大字典』で「壱」の読みが「タイ」とはなっていない。呉音で「イチ」、漢音で「イツ」、当用漢字で「イチ」と読まれている。藤堂が生前に「タイ」と読んだことがあったために、共訳者の「弟子」たちがその藤堂の「意向」を損なわないように訳出したものなのだろうか。それとも、藤堂は「イチ」と読んでいたのに他の編者が藤堂説を無視して、藤堂の権威を借りて「タイ」と読んだのだろうか。竹田氏はすでに他界している。影山氏にいきさつを聞いてみたいものである。

辞書の客観性が損なわれる一例としてあえて述べた次第である。そしてさらに、そのような藤堂の著作を丸写ししたと思われる他の編者が複数存在するとはあきれてものも言えない。「丸写ししていない」と主張するのであれば、「北海〔バイカル湖〕」と書いた意図をぜひとも、説明してもらいたいものである。

また、出版社のチェック機能はどうなっているのだろう。

「辞典類は信用しすぎてはいけない」という教訓が得られたようである。

4. 漢和辞典・字典も出典の記述が必要

ここまでくると、漢和辞典も典拠・根拠を示さなければならなくなるだろう。なぜ、「北海〔バイカル湖〕」と記されたのであろうか。

『新漢語林』と『漢字海』の場合には典拠は藤堂であろうか。藤堂の典拠は何か。さらにまた『新漢語林』の「池」は何を典拠にしているのか。これらの出典を求めたいと考えるのは私だけであろうか。

和田家文書備忘録　第12回
「神風史観」

港区　安彦克己

昨年２０２４年は文永の役（1274年）から７５０年目にあたる。近年、伊万里湾の鷹島沿の海底で発見された蒙古船など考古学成果も次々と発表されている中で、筆者は先学の史料誤読を鋭く指摘し従来説批判した服部英雄の著書『蒙古襲来と神風』（注１）に注目した。帯封には「鎌倉中期、日本は対外戦争を経験する。二度にわたる蒙古襲来（元寇）である。台風が吹き、文永の役では敵軍が一日で退散し、弘安の役では集結していた敵船が沈み、全滅したとされる。

だがそれは事実なのか。本書では、通説の根拠となった諸史料の解釈を批判的に検証。『蒙古襲来絵詞』ほか

良質な同時代史料から真相に迫る。根強い**「神風史観」**をくつがえす、刺激に満ちた一冊。」とある。

古田先生のもと「多元史観」「近畿天皇一元史観」のシャワーを浴びていたが、中世に現代社会にも強く影響する歴史観があるとは管見にして知らないでいた。

巷間語られる〝神風が吹く〟との夢想伝説は、時の為政者によって信じ込まされていた、その一例を中沢啓治著『はだしのゲン』（注2）から引いてみよう。ここでは女の戦争責任がテーマ。

「男が勝手に戦争をやって、いつも泣かされるんは弱い女のうちらじゃ。戦争がなかったら、ピカも落とされんですんだけんのう。ほんとうに男はしょうもない奴らじゃ…」（中略）「日本中の女が、体を張って反対したら、男の思うようにできず戦争はふせげたはずよ。それを、日本は**神の国**じゃけえ、**神風**が吹いて**神様の天皇**が国を守るけえ日本は絶対に戦争に勝つと、（中略）今上天皇を**神様**としてありがたがり、デタラメの皇国史観を信じきった女も大バカなんよ…」とある。作者が言うように、「神風史観」は「皇国史観」にも通底している。

著者服部英雄の通説批判は1931年（昭和6年）に発表された池内宏の『元寇の新研究』（注3）に専ら向けられている。

「神風史観の骨格は文永の役における嵐によって一夜で殲滅と、弘安の役に鷹島における全軍殲滅なるものは、幻想・虚像に過ぎない」（注4）とある。後に続く研究者がこの論文を「無批判に孫引き」（注5）したことから「神風史観」は無自覚な市民にも広がっていったと筆者は推している。

秋田孝季と比較するために同時代の国学者本居宣長の著書『馭戎慨言』を「神風史観の拡散」の観点で繙いてみた。

出版は寛政八年だが、十八年前の安永六年四十九歳で脱稿している。馭戎は異民族を支配する、慨言はおおまかに話す、の意。同書下巻上で元軍の退散について

「其の船どもあまた破れぬるは、もはら**皇神（すめがみ）たちの御守り**なり」

「伊勢の**風宮の神の御さとし**などいちじるかりし」（風宮は外宮境内社）

「さてかく俄にはげしき風のおこりて、たやすく賊の軍のほろびうせぬるは、世にも語り傳ふるが如く、まことに**皇神たちの御力**なり。（略）**神の御國**の御いきほひよ、かしこし共たふとしともいへばさらなり。然るをもろこし人は、此**神の道のくしび**（霊異）なることわりをばえ知らで、、、」と認めた。宣長は荷田春満や松下見林に始まった国学から蒙古襲来を解釈し、皇神による激しき風（神風）によって「亡び失せた」と認めた。一方で「世にも語り傳ふるが如く」とあることも注意したい。

「邪馬台国」研究史にも現れる松下見林は、『異称日本伝』で『元史』の中から関係史料を網羅的に抽出し、各に考察を加えている。「外夷伝、高麗」を引いて

「今按、（中略）知**我朝天険神威**不可犯。（略）以**天**厭征伐海風怒號、沈巨艦千艘、、、

（「今按ずるに、、、我が朝の天険神威の犯すべからざるを知る。（略）天は征伐をきらって海風怒号し、巨艦千艘を沈め、、、」）と述べる。見林も我が朝には天険神威があり、天に座す神のお陰だとしている。

みたように、先駆的な国学者は服部英雄が言う「神風史観」そのものであった。

では『和田家文書』では神風をどう解釈していたか、探ってみよう。『神風』で検索、七点見出した。

史料1　奥州隠史大要一　蒙古来襲之事　（和田家文書コレクション）

「二十日に大暴風雨起り、博多浦に元の船舶の半数は沈没し、元軍は二十一日一兵残らず朝鮮に引揚げ、三萬人が災死せり。時に倭軍は是を神風として、戦勝無きも元軍引退を悦びたり。」

記年は江戸初期の元和二年、本居宣長のそれより一八〇年も古い。

史料2　北鑑　第58巻　（北鑑）

「對馬及び壱岐を犯し、築紫に大船團を以て元寇せり。然るに季節風に襲はれ、軍を退けたるを神風とて倭史に記し遺れり。

寛政七年八月　　報恩寺藏」

報恩寺にはフビライとマルコポーロの羅漢像が祀られている。寺名はその歴史を伝えている。

史料3　東日流外三郡誌　第360巻　奥州古事抄　（和田コレ）

「文永十一年と弘安四年の二度に

渡るゝ来襲に依り、戦に非らず大風に依りて敗退す。（中略）この大風を神風とて史談に遺れり。（中略）マルコポーロ親しく安東船のみは、運河を通し長安・洛陽までも通交を赦せしに、朝幕をしてその商易を断ちてその請願に来たる使者を、時宗自らが斬りぬ。」

史料４　丑寅日本記全　北辰鑑　二（和田家資料）

「倭にして是ぞ國難なれど奥陸にして元王は救世主とぞ相違せる史談實相ぞ、後日にして蒙古来襲神風を日蓮坊の法力とぞ曰ふあり。内海水軍の武勇傳とぞとか、國神の起したる神風とかに史談遺りぬ。依って、神代さり乍ら代々にして史は作説に實相は消ゆるなり。」

史料５　北斗抄９　八（和田家資料）

「大凶作なる奥州・羽州の飢を救ひたる、クリルタイの掟に依りて救済せし蒙古の大慈悲。丑寅日本國にては倭史とはうらはらにして、かく遺れり。元國揚州の湊に交易せる安東船の事ぞ、倭史に記述もなかりきは自業自得の國難たり。幸いなるかな、陸戦ならざる海戦にて、季節大風にぞ元軍は退きしを神風とて奇蹟を倭史に遺るらん。」

史料６　北斗抄４　奥州今昔抄　一（和田家資料）

「倭にしては韓人・三別抄の注言にも返状すらせず、元使を断罪しけるに付き、遂には十萬の大軍を挙兵し對馬・壱岐・筑紫に戦端を起せり。然れども天祐は嵐を起し、元軍はことごとく海の藻屑とせしにや、倭人らは是を神風と讃ひたり。寶暦元年（1751）」

史料７　東北陸羽史談２　異神遺跡之巡禮記　（和田コレ）

「倭国にては国難とて、筑紫博多に石柵を築きて元寇に国防せし歴史の遺りき、彼の神風の傳説、朝幕挙げて彼の来襲に備へしむ史談にあり。」

ここから判ることは、倭史（朝幕史）では神風で元軍が敗走したと書いているが、『和田家文書』は自然現象である大風が神による風であるはずがない、との異を唱えている。史料４では、踏み込んで、「神代さり乍ら、代々にして（倭）史は作説」であると喝破もする。『和田家文書』は神風史観からも皇国史観からも無縁であった。

冒頭の『はだしのゲン』の件は、当時女性に参政権がない時代であったが言は鋭い。この台詞の後に、冒頭の引用が続く。

「女も悪いんよ。女も戦争せえと喜んで協力したんよ。（略）おばさんも国防婦人会や愛国婦人会に入って自分の大事な主人や息子に、国のため天皇のため立派に死んでこいと言うたんでしょうが」（注６）

（注１）服部英雄著『蒙古襲来と神風』中公新書　2017年

（注２）中沢啓治著『はだしのゲン』全７巻　金の星社2020年７巻316頁

（注３）池内宏『元寇の新研究』東洋文庫論叢　1931（昭和６年）

（注４）（注１）に同じ　53頁

（注５）（注１）に同じ　49頁

（注６）（注２）に同じ　７巻315頁。

倭国の遣使先とその遣使姿勢
―「対等外交」の真実―

世田谷区　國枝　浩

はじめに

通常、倭国について論じる場合には中国の史書類と『日本書紀』という日本の史書を突き合わせながら行われる。しかし私は『日本書紀』の対中国国交史については絶対的に懐疑の目を向けている。そこで、中国の史書類のみに基づいて倭国の国交について考えてみたい。日本の古代の対中国国交史を論じる場合には中国の史書類が基本資料になるという考え方を貫き、ここでそれを実行に移してみたい。本稿で論じるのは日本史を語るうえでの基本問題、「対等外交」についてである。有名、かつまた基本的な問題なので、「今さら」という感はあるが。

ところで、中国の史書に登場する倭国は、ヤマトにあったのか、それとも九州にあったのかという日本古代史の根本問題に対する私なりの考えは、すでに諸論考で述べてきたように九州だと考えている。したがって私は倭国ということもあるが、九州を強調する、つまり近畿ではないという意味で、「九州倭国」と言うことがある。

ここでは、倭国が遣使を行った中国の王権がどのような性格の王権であり、遣使の際に、倭国が中国の王権に対してどのような遣使姿勢を取ったのかという視角から考えてみたい。もちろんここで述べることは一つの仮説にすぎないのだが。

まず、中国の前漢以降の王朝の変遷と列島からの対中国遣使関係を一覧表にして追ってみる。

この表について説明すると、縦に長いのは統一王朝を意味する。

倭国の中国への遣使は前漢の時代に始まり、その後、後漢、魏、西晋、南朝の宋、斉、梁へと続く。この王権の系統を「南朝系」と名付ける。一覧表の黄色は南朝系の王権を示してい

る。これに対して、隋と唐は北朝が南朝を滅ぼした後の統一王朝である。北朝と隋、唐の王権を「北朝系」と呼び、一覧表では緑色で示されている。

第一節　『隋書』の対等、『書紀』の朝貢

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」が記載された『隋書』倭国伝を「天子対天子」の書、あるいは「対等外交」の書と呼びたい。私の遣隋使における「対等外交」観の基本は自分自身が受けた授業内容に則しているのだが、現在でもその見解を大筋で変更する必要がないと考えている。ところが近年の遣隋使評価は変わってきているようだ。日本古代史研究者の中に推古朝が遣隋使を送った時の姿勢は「対等外交」とは言えない、「朝貢外交」の一環であったなどという見直しの議論が優勢を占めつつあるようなのである。紙幅の都合上、この点の詳細は別稿に譲りたい。ここでは私の基本的見解だけを述べてみたい。

中国の史書類によれば、南朝系の前漢から南朝の宋、斉、梁まで、中国の王権に対する倭国の姿勢は、いわゆる「朝貢外交」であった。これに対して、隋・唐の時代になると、倭国の遣使姿勢は大きく変化している。隋に対する遣使姿勢は「対等外交」であった。つまり、『隋書』の多利思比孤による「天子と天子」の表明がそれを示している。

年代	漢とその後継國・南朝系		北朝系	
BC1世紀	前漢	倭国		
57年	後漢	倭奴国	金印	
107年		倭国	帥升を派遣	
239年	魏	倭国	卑弥呼が遣使	
240年			魏が梯儁を派遣	
243年			倭国掖邪狗派遣	
247年			魏が張政派遣	
不明			倭国壹与が掖邪狗派遣	
266年	西晋		倭国壹与が遣使派遣	
五胡十六国　列島からの遣使なし「空白の四世紀」				
421年	南朝宋	倭国讃	北魏	北朝
425年		倭国讃	―	
430年		倭国讃	―	
438年		倭国珍	―	
443年		倭国斉	―	
451年		倭国斉	―	
462年		倭国興	―	
473年		倭国武	―	
478年		倭国武	―	
479年	南朝斉	倭国武	―	
502年	南朝梁	倭国武	北周	
遣使なし				
589年	南朝系が滅び北朝系の隋により中国が統一される			
600年	隋	倭国	多利思比孤	北朝系
607年		倭国	多利思比孤	
608年		倭国	隋が裴世清を遣使	
631年	唐	倭国	倭国遣使、唐高表仁遣使	
648年		倭国	新羅に付いて表提出	
659年		倭国	蝦夷を伴い遣使	
663年		倭国	白村江の戦い	
670年		日本国	咸亨元年初の中国遣使	
670年～		日本国	以後、次々遣使・則天時に倭国から日本国に改号	
703年		日本国	粟田真人らの遣使	

対等外交を唱える伝統的な通説的解釈では、「聖徳太子や蘇我馬子などが偉大だったから」というような憶測的な理由が挙げられて済まされていなかっただろうか。まず確認できることは、「対等」の関係は『日本書紀』からは読み取れないという問題がある。だから通説的には『隋書』に書かれた「天子対天子」を典拠にしていた。自説に好都合なものに、必要に応じて頼り、不都合なものは批判するか無視する。これは一種のご都合主義ではないだろうか。日本の古代史、特に対中国交史は中国の史書類に依拠して成り立っているのだという事実は無視できない。卑弥呼や壱與、倭の五王、開皇二十年の遣隋使、これらは中国の史書に記載されていなかったならば、まったく知ることはできなかった名前であり、事項である。中国の史書類の残してくれたものに対して謙虚な姿勢が必要なのではないだろうか。

さてその一方で、通説の抱く「対等」外交の夢は通説が頼りにする『日本書紀』自身が否定していた。推古朝が「対等外交」の姿勢を保持していないことを露見させてしまっているのである。つまり、推古紀十六年秋八月三日条（長くなるので引用は割愛する）に記された中国皇帝からの一種謎の国書には、推古朝が中国に「朝貢」したという記事が残されている。もしも、推古朝が「対等外交」の姿勢を持っていたならば、『日本書紀』は「朝貢」の文字を削除したのではないだろうか。あるいは、「朝貢」に対して何らかの形で中国に「抗議する」必要があったのではないだろうか。しかしそれらはなされていなかった。「対等外交」の史資料は『隋書』にしかない。この点は確認しておきたい。

第二節　北朝は「北狄」であった

上記の一覧表の中で注目するべき点を挙げていこう。まず、倭国が遣使した中で、前漢、後漢、魏、西晋、南朝の宋、斉、梁は南朝系であった。つまり、隋の前まではすべて南朝系への遣使であった。そして、ここまでの遣使の姿勢は「朝貢」と考えてよい。勇ましい倭王武の上表文でさえも朝貢の姿勢を崩してはいなかった。

さらに、九州倭国の遣使が行われた時期である。遣使は一方では、中国の王権が比較的に安定している時期に行われている。しかし他方で、倭国は中国の王権が革命や動乱などを経て、中国の国内が安定した時期を見

計らって行われることもあった。例えば、卑弥呼の魏に対する遣使は、魏が帯方郡で公孫氏を制圧した直後に行われた。また、倭の五王と言われる倭王讃が南朝宋に遣使したのは、宋が建国したばかりの４２１年であり、さらに倭王武の最後の遣使となった５０２年は、南朝の梁が建国された年であった。中国の王権に対する情報には九州倭国は鋭敏であった。中国の政治状況を注視していたのであろう。

これに対して、逆の意味で注目すべきは、中国の王権が南北朝に分裂しているときに倭国は北朝には使いを送っていない。先にも述べたように、倭国は南朝の宋、斉、梁にだけ遣使していた。北魏（３８６～５３４）は特に王権の安定期は長かったにも関わらず倭国の遣使先になってはいなかった。なぜ、倭国は北朝に遣使しなかったのか。倭国が北魏を含む北朝に朝貢しなかった理由は次の三つが考えられる。

（１）東夷と北狄は「対等」

北魏王権は北方騎馬民族である鮮卑と、それを助ける形で政権の有力貴族になっていた、やはり北方騎馬民族の匈奴によって樹立された王権であった。南朝系王権による中国の華夷思想からすれば、北朝・北魏は「北狄」であった。「東夷」である倭国と同等、同列であったのである。まず、おそらく倭国は「小・中華」の態度で「北狄」の北魏をむしろ蔑んでいた可能性がある。「東夷」と「北狄」の関係ならば、両者は「対等」ではないか。これが第一点である。

（２）南朝系との通交の実績

なにしろ九州倭国と南朝系との交渉の歴史は前漢の時代から続いていたので、その時点でおよそ五百年という長きにわたるものであった。南朝系への「義理立て」もあっただろう。この遣使関係の長期にわたる伝統は、北魏をはじめとする北朝系を軽視するとともに、むしろ倭国が自らを誇る材料であったのだろう。倭国のこの立場からすれば、北魏をはじめとする北朝系と朝貢関係を結ぶなどはもっての外だと考えても不思議はない。

（３）南朝文化を摂取する北朝

倭国が北魏を含む北朝に朝貢しなかった理由の三つ目は、北朝自身が南朝の宋から南朝系の伝統や文化を様々な形で学ぼうとしていたことである。まず、北魏王朝自身、その出自を偽り、自分たちが周、漢、魏などの真の後継者であると吹聴していた。「北魏」といわれる国名も北魏自身の意識では「魏」だが、これも三国の時代の南朝につながる王朝「魏」の後継であり、また自らも南朝系の伝統を受け継いだのだと自認していたことの表れである。そこで南北朝に分裂し、南朝と敵対関係にあったにもかかわらず、北魏は宋などの南朝系文化を積極的に摂取しようとしていたのである。

例えば、北魏は宋などから儒教や道教、仏教などを取り入れる、さらに自分たちの母語、鮮卑語を禁止して漢語、漢文を使用する、鮮卑族の服装をやめ南朝式の服を着る、さらに漢風の一文字の姓を採用する、などということが行われていた。そうであれば倭国は、学ぶべきものは北朝にではなく、南朝の宋や斉、梁などにあると考えるのは当然であった。

第三節　統一王朝の隋も北狄

北魏は六鎮の乱後に、西魏と東魏に分裂した後、北周となり、北周から禅譲を受けた楊堅が実権を握るようになり、５８１年に隋を建国する。

他方、南朝宋は北朝系の圧力に押されて、中心都市であった長安や洛陽を北朝に明け渡してしまう。そして揚子江南岸の建康を首都とする。南朝の王権を列挙すると、宋、斉、梁、陳となる。宋と梁は王権を６０年ほど維持するが、斉と陳は権力争いや王権の腐敗などにより短期で終わっている。その弱体化した南朝の最後の王朝、陳を倒すのは北朝の隋にとって容易なことであっただろう。こうして南朝が滅び、北朝の隋が５８９年に中国全土を統一することになったのである。

ということは、倭国にとっては隋もまた、たとえ強大になったとしても「北狄」にすぎないという位置づけになるだろう。そこで、倭国の国王、阿毎多利思比弧の隋に対する遣使の姿勢は、以前とは変わっていくことになる。結果的に、倭国の外交姿勢は「朝貢」ではなく「対等」の立場になったのであった。

しかし、この間の事情を『隋書』から判断する限りにおいては、倭国の国王、阿毎多利思比弧の心情は複雑なものであったに違いない。以下は私の推測である。まず、統一王朝隋の開始時点は開皇元年（５８９年）であったことからすると、倭国の遣使が隋の開皇十二年（６００年）と十年余の時間が経過している。統一王朝隋の建国後、即座に遣使していない。倭国は「北狄」である隋の様子をしばらく見ていたのかもしれない。隋が長期王権になるのか、またどんな施策をするのかなど。さらに、隋に対する

態度も決めなければならなかったであろう。長期に渡り国交関係を持っていた南朝系の王権への「義理」もある。さらに、報復はしなくてよいのか、あるいは南朝系の王権が滅びた今、これに次ぐ王権は「北狄」の隋ではなく、我々、「東夷」の倭国ではないか。倭国が北朝系の中国の王権を支配するところまで考えたか否かは分からないが、それに近い思惑などが多利思北弧の頭をかすめたかもしれない。少なくともこのような様々な思いを巡らし、また葛藤があったのではないだろうか。

そしてその上で、隋に遣使をするのか否か、決断しなければならない。もし隋に遣使をすることになれば、南朝系以外の中国王権への初めての遣使になる。どのような態度で臨むべきか。以上のことを考慮する時間が十年余だったのではあるまいか。出された結論が、いわゆる「対等外交」であった。

倭国による対等外交の書は隋の二代目皇帝の煬帝を怒らせている。しかし、隋も対等外交を打ち出した倭国が現在どのような国になっているのかが気がかりになった。「様子を見てこい」ということであったのであろう。隋は大業四年（６０８年）に裴世清を倭国に遣使させる。隋の煬帝も複雑な心境であったのだろう。ここに、外交関係の難しさが顕著にあらわれているのであった。

第四節　九州倭国と唐　「対等外交」としての「対唐外交」

次いで、隋が滅びた後の王権である唐もまた鮮卑・匈奴の王権であった。隋が滅びたのが６１８年。倭国から唐への遣使は唐の第二代皇帝、太宗(在位：６２７～６４９)の貞観五年（６３１年）に初めて行われた。それでは、倭国の唐に対する姿勢はどのようなものであったのだろうか。『旧唐書』倭国伝には次のように記されている。

貞観五（６３９）年、倭国の遣使が方物を献じた。太宗は、その道中の遠きを不憫に思い、勅使で所司に歳貢を無用とさせ、また新州刺史(州の長官)の高表仁を遣わして、節を持して行かせこれを慰撫させた。表仁は慎みと遠慮の才覚がなく、王子と礼を争い、朝命を宣しないで還った。

貞観二十二（６４８）年、また新羅に付いて表を奉し、もって音信を通じた。

この『旧唐書』の記述から分かることを見てみよう。高表仁に倭国を「慰撫させた」とある。唐突に「慰撫」と書かれている。「慰撫」とは、怒りや不安を持つ人を宥めて慰める、平安な気持ちにさせることである。『旧唐書』には互いの国書が載っていない。両国の関係が理解できるようなこともこの「慰撫」の他には書かれていない。しかし、明らかに倭国は唐に対して不穏なものを持っていたのである。それは、怒りであるかもしれない。あるいは敵愾心、反抗心であるのかもしれない。あるいは少なくとも、何かで「腹に一物持っていた」のである。それは隋の裴世清が倭国に送られてきたときの状況と似通っていたと思われる。倭国は唐に対しても朝貢姿勢は取らず「対等外交」、あるいはそれ以上の強硬姿勢を示していた可能性がある。そこで唐は倭国を「慰撫」しなければならなくなる。不安を抱き、高表仁を倭国に遣使する。隋の時代の裴世清と同様に。

が逆に、事の深刻さを表している可能性があるだろう。

両国間の疎遠さ、冷えた関係は、６４８年の『旧唐書』倭国伝の最後の記述にも現れている。先の『旧唐書』の記述されたものの後半では、倭国は「新羅に付いて表を奉し」とあるが、倭国は国書だけを新羅の遣使者に託したともとれるだろう。あるいは、新羅の遣使者に付随して渋々、国書を持参したともとれる。倭国は唐に対して独自に積極外交を行おうとはしていない様子がうかがえるのではないか。

そして、これとは対照的に『日本書紀』の舒明紀では、高表仁は舒明朝に大いに歓迎され、むしろ友好的な関係が描写されているといえる。『書紀』からは、とても白村江戦に突入するような関係性はうかがえない記述になっている。通説はこのような冷えた関係、戦争に突き進むような関係を『日本書紀』を基にしてどのように説明できるのであろうか。『日本書紀』を基にしては「対等外交」も説明できないばかりでなく、白村江戦に突き進む必然性も描くことはできない。

まとめ

ここまで述べてきたことを簡単にまとめておくと、倭国は南朝系の王権に対しては、つまり漢から南朝の宋、斉、梁までの王権に対しては、基本的に「朝貢」姿勢をとり続けてきた。これに対して南朝系の王権が「北狄」と呼んできた北朝の王権には一度も遣使せず、さらに「北狄」主体の隋や唐に対しては「朝貢」を拒否し、「対等外交」、ないしそれ以上の強硬な態度で九州倭国は臨んできたと言えよう。そして、その結末が白村江の戦いであった。九州倭国はついに唐と一戦を交えることになり、敗戦によって弱体化していったと思われる。こ

の意味で、九州倭国の中国の王権に対する姿勢は首尾一貫したものだったと言えるだろう。いずれにしても、九州倭国の中国への遣使記事、「倭国伝」は『旧唐書』で終わるので、本稿もここで終了する。

私のこの論考は、中国の史書にのみ依拠したものである。対中国との外交史については、中国の遣使記事を私は基本資料とし、『日本書紀』の外交史、また『書紀』に基づく通説的研究の真偽を判断する役割を持つものと考えている。

また先にも触れたように、現在の遣隋使研究の動向と、それに対応するかのように変わっていく学校の教科書類の変化について別稿で論じてみたい。

コーヒーブレーク

国立科学博物館DNA展見学会報告

千葉市　倉沢良典

令和7年4月18日 13:00。晴。薫風心地よいJR上野駅公園口に集合。安彦克己会長以下総員8名で、国立科学博物館で開催中の古代DNA展を見学しました。会場に入るとすぐに白い照明の下に白保人(白保竿根田原洞窟遺跡4号人骨)の全身人骨の本物が展示してありました。白保人のDNA解読は右下6番の歯根が水平に切り取られていたので、＊おそらく下顎骨より歯根を切断採取して、その歯根部歯髄から組織片を採取し、DNA解析装置を使用して塩基配列を決定したのではないでしょうか。(＊以降推測です)

我々はDNA解析の結果をやすやすと見ていますが、当該資料は超貴重なものですし、解読に至る手技も実際にはさぞや大変だったろうと推察致します。研究報告書が有るようですが、この感想文を書いている時点では申し訳ありませんが、まだ読んでいません。

骨格標本を仔細に観察すると、歯牙咬合面が前歯から臼歯まで水平にすり減っています。すり減った量は歯冠部高径のおよそ4分の1くらいでしょうか。ゆっくり擦り減らないと歯髄炎を起こしてしまうほどです。原因は食べ物に砂が混じっていたか(注1)、或いは魚やイノシシ等の骨等を日常的にかじっていたのかもしれません。その解明は骨中のO_2同位体比を測定すると判るはずですし、実際別のコーナーで伊勢湾沿岸に居住していた2グループの縄文人と弥生人の食性分析が展示してありました。

それにしても本物の迫力は凄い。ここだけで30分以上矯めつ眇めつ眺めてしまいました。そのため出口集合に大幅に遅れてご迷惑をおかけしました。

次に興味を引いたのは、沖縄地方産出の貝、弥生人は腕輪にしていた、

の交易ルートでした。解説文によればこの交易は7世紀(?)に突然中断しその後11世紀(?)に再開したとありました。これは九州王朝が白村江の戦い(663年)で壊滅して、経済力を失ったからではないのか。九州王朝の存在証明の傍証の一つではないかと考えました。

ちょっと残念だったのは、当展示会ご企画の学芸員さんのご見解ではあるのでしょうが、三角縁神獣鏡は魏からもらったとか、古墳形態の分類からヤマト政権が全国支配したと証明できる、と言う説明文です。古代DNAと直接関係は無いのではないですかと、一人つぶやいていました。DNA解析や酸素同位体比は見解が分かれようのない事実です。それが知りたいのです。

また大方のご参加者にとっては、縄文人につながる新石器時代人が北から来たのか、南から来たのか、北から来たならばそのユーラシア大陸東部での移動ルートはどうだったのかの、はっきりしたDNA解析のエビデンスに基づいた説明がない事が今一つ残念でした。

(注1) オーストラリアアボリジニー、歯列、歯科矯正、の語彙でキーワード検索すると歯牙咬合面の摩耗に関する沢山の歯科医学研究が検索できます。

令和7年4月19日記

古代史エッセー　85

「倭国」、「女王国」、「邪馬壹国」

日野市　橘高　修

【倭人伝に出てくる国名】

三国志・魏志・東夷伝・倭人条（以下、倭人伝）には倭人の住む場所や国を表す固有名詞がいろいろ出てきている。古代史に詳しい人たちと話をしていても、皆が共通の認識をもっていないために話しが食い違い議論がかみ合わない経験をすることが少なくない。ここでは倭人伝に出てくる場所名あるいは国名をいくつか挙げて異同を確認してみたい。

倭人伝は、倭人が住む場所の位置、戸数、風俗などがかなり詳細に記されており、３世紀の日本列島について記された数少ない文字史料である。その他後漢書、隋書、旧唐書などにも多少記載されているが、倭人伝に基づいているものが多い。

倭人伝の中で倭国などがどのように記されているかを見てみることにする。倭（１４回、内倭人１回、倭種１回、倭女王３回、倭王４回）、邪馬壹国（１回）、女王国（４回）、女王の境界（１回）、倭地（２回）、倭国（３回）、女王（１回）。

卑弥呼は倭人伝に登場することでわれわれが知ることができるのであるが、原則的には、卑弥呼が統治している範囲を倭国あるいは女王国と呼び、女王国の中で卑弥呼の宮殿がある国を邪馬壹国と記している。後述するが、倭人伝には女王国が邪馬壹国のことをあらわしているケースもあるのでややこしくなっている。

日本列島の中には倭国以外にも倭人が住む範囲があった。女王国の南に狗奴国、女王国の東方向に海を渡って千余里の場所にも倭種が住む国がある（国名は記されていない）。その南に侏儒国、女王国から四千余里の場所に裸国、女王国から東南方面に一年かけて船で行った所に黒歯国がある。侏儒国・裸国・黒歯国には倭種が住むとは記されていない。

【「倭国」、「女王国」、「邪馬壹国」、及び類似語の使われ方】

●「倭人」は冒頭に一回出てくるが、「倭人」の「倭」は海の彼方の日本列島を漠然と表しており、「倭人」は日本列島に住んでいる人位の意味と考えられる。

●「倭種」も「倭人」と同様な意味か。

●「倭」あるいは「倭女王」、「倭王」と使われている「倭」は卑弥呼が統治している範囲を指している。

●「倭地」は周旋五千余里の範囲。気候・風俗などが記されており、卑弥呼の統治範囲の全体像を述べている。九州島の北半分くらいのエリアになるのだろうか。

●「倭国」は３回出てくる。

「帯方郡から倭国に使者を送る」、「乱れた倭国に一女子を共立した」、「魏の使者が倭国に詣り」、というような使い方をしているので、卑弥呼が統治する範囲のことである。

●「邪馬壹国」が出てくるのはわずかに１回。卑弥呼が統治する３０余国のひとつであり、卑弥呼の居住する宮殿がある。「邪馬壹国」が倭国全体のことと勘違いしている人や混同して話す人が多いのは困ったものである。「邪馬壹国」は中心国であるが、倭国の一部にすぎない。

●「女王国」は４回出てくる。

「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の旁国は遠絶にして得て詳かにすべからず」の「女王国」は「邪馬壹国」のこと。

「帯方郡より女王国に至る万二千余里」の「女王国」は「倭国」のこと。

「女王国より以北には特に一大率を置き、諸国を検察せしむ」の「女王国」は「邪馬壹国」のこと。

「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種なり。」の「女王国」は「倭国」のこと。

同じ「女王国」でも「邪馬壹国」のことだけではなく、卑弥呼の統治範囲全体である「倭国」のことをあらわしている場合があることがわかる。

●女王国の中で「その余の旁国」とされる２１ヶ国が列挙された後に「女王の境界の尽くる所」とあるが、ここに出てくる「女王」も卑弥呼が統治している範囲全体を示しており、境界の南には敵対する狗奴国がある。

●「女王」だけで場所をあらわしているのはもう一ヶ所「女王を去る四千余里。また裸国・黒歯国あり」で、「女王」は統治範囲全体を示している。

【倭国と倭地の違い】

倭人伝は海東に存在する日本列島の情報を少しでも詳細に記載しようとしている。日本列島には倭種と呼ばれる人々が住んでいて、倭種が住むエリアを倭地と呼び、倭地の中で卑弥呼が支配する範囲を倭国あるいは女王国と名付けて記載している。

女王国の南にあって対立していると記されている狗奴国は、倭種が住んでいると思われるが、倭国には含まれない。

【倭国と邪馬壹国】

「女王国」のように「倭国」の意味にも「邪馬壹国」の意味にも使われる言葉が一つでもあるとややこしくなってしまう。「邪馬壹国」＝「女王国」、「女王国」＝「倭国」なのだから「邪馬壹国」＝「倭国」も成立すると考えてしまうのだろう。

「倭国」と「邪馬壹国」は、日本と東京の違いに相当すると考えるとわかりやすい。

「東京古田会」月例会報告⑪
※文責：新保

●二〇二五年三月度　明石町区民館にて、参加者は会場十四名、リモート六名程度。

第一部（研究発表と懇談会）　司会は中村忠夫幹事

【研究発表】「縄文人のＤＮＡ」（石田泉城氏※東海古代史研究会）（一）発表内容：以下の項目について要領よく纏められた資料に沿って丁寧に解説。①縄文・弥生人の定義と縄文時代区分、②ＤＮＡ関連の基本的な整理、③ホモサピエンスの長い旅（アフリカ単一起源説と日本列島二重構造モデル説）、④Ｙ染色体とミトコンドリアのＤＮＡ、⑤現在の各地の縄文人・弥生人情報、⑥突然変異とＳＮＰ、⑦まとめ。（二）質疑等：①ＮＨＫの一年前の放送。②全ての人類が同じ母系のミトコンドリアを持つのか。③北方系Ｎ９ｂの発祥地はどこか。④アイヌ人は縄文人に一グループか。⑤Ｎ９ｂ関連でオホーツク文化の流入時期は。⑥埴原説に関連して。⑦本土でＮグループを持つ人で南方系ルーツはありえるか。⑧列島内のＤＮＡ分析はいつ頃の遺跡から可能か。（三）感想等：①学術的な用語等を丁寧に説明され、とてもわかりやすかった。②多岐にわたる質問にもきちんと回答された。③この問題に対する氏の高い見識が伺えた。（発表九〇分・質疑四〇分）

【懇談会】　第二部の終了直前に会長からの指名で、新保幹事が「高校教科書二冊の〔日本史・古代編〕の読後感と懸念事項」（①大和政権（ヤマト王朝）の成立根拠を巨大古墳と関連付けている、②倭国九州王朝説には全く触れていない）を紹介。※詳細をＨＰに掲載。（二五分）

第二部（勉強会と読書会）　司会は新保幹事

【勉強会】「古田武彦『盗まれた神話』その五」（一）対象は、第八章〔傍流が本流を制した〕。（二）要点は、①この章は十四節から構成。②概要として、「日向の高千穂」に降臨したニニギノ命は本流ではなく分流だったことを論証し、以後の穂穂出見命（山幸彦）、ウガヤフキアエズから神武天皇への流れを検証。なお、先生は「神武兄弟は宮崎の日向を根拠とした豪族で、そこから東征した」とされたが、その後、これを改められた。（三）質疑などで、①「海幸・山幸説話」を筑紫から日向への舞台廻しとされた古田先生には先入観があったのでは。②『日本書紀』と異なって、『古事記』は庶民にとって隠された書物。③神武東征は作文か。神武東征の目的地は大和ではなく遠賀川流域との説も。（解説・質疑三〇分）

【読書会】「岩波文庫『日本書紀』持統紀その五」（一）対象項目は持統五年条。トピックは持統紀にのみ登場する記事「持統の三一回の吉野行幸」。（二）主要な記事は、〔正月〕食封を加増、〔三月〕造籍に際し良賤基準を制定、〔八月〕十八氏が墓記を上進、〔十月〕新益京で地鎮祭、等。（三）質疑では、①正月条「筑紫大宰府典筑紫史益への詔」に先行論稿（『市民の古代第六集』（一九八四年）前田博司「九州王朝の落日」）。②同、ここに記された二九年前の出来事として「白村江戦」。③三月条「良民と賤民」で、ここ以外での「賤民」の表記例（「賤」は景行～持統紀に一四カ所出現するが、賤人の意味は、賤賊（景行）、賤奴二・卑賤為使（欽明）、賤者（持統））。④「吉野行幸」は目的が不明、天武・持統紀に頻出する広瀬・竜田神の祭祀と合わせて記事にした可能性も。（解説・質疑三五分）

●二〇二五年四月度　佃区民館にて、参加者は会場十六名、リモート七名。

第一部（研究発表と懇談会）　司会は斎藤事務局長

【研究発表】「地球の気候変動および東北の環境変遷」（斎藤隆雄氏）テーマは、「地球の気候変動」に関する一般論のまとめ。（一）説明内容：主要な項目は、①現在は第四紀氷河期の間氷期（この説明と変動を繰返す理由等）、②東北日本と西南日本との様相の相違、③津軽平野や日本各地の縄文海進とその理由、④プレートテクニクスの解説、⑤火山活動（大規模噴火と火砕流・降灰の影響）、⑥砂丘地形（青森・七里長浜を中心に）。（二）質疑等：①地球温暖化に関する質疑が多数。斎藤氏は「この問題は十万年単位の大きなスパンでみていくべき」と。②日本列島が大陸から離れたのは二千万年ほど前。（三）感想等：①緻密な資料に基づく丁寧で分かりやすい説明。②大量の関係資料の収集と読み取りの努力に感服。③驚いたことは、欧米に「縄文海進」なし、列島の東北日本と西南地方とは観音開きの方向に動いている等、多数。（発表八〇分・質疑三五分）

【懇談会】　休止。

第二部（勉強会と読書会）　司会は新保幹事

【勉強会】「古田武彦『盗まれた神話』その六」（一）対象は、第九章〔「皇系造作説」への疑い〕。（二）要点：この章には三つのテーマ（①神武東征

神話②ハツクニシラス天皇とされる神武と崇神③和風諡号)。論証過程で津田左右吉等が提唱するいわゆる「通説」の根拠を鋭く追及。(三)質疑等:「和風諡号」関連で、「漢風諡号」の作成者とその時期が討論された。なお、遠山美都男著『名前で読む天皇の歴史』(朝日新聞出版)でこの問題を扱っている。(発表・質疑三五分)

【読書会】「岩波文庫『日本書紀』持統紀その六」(一)対象項目:持統六年条。トピックは「昔」と「車駕」記事。(二)主要記事:〔一月〕、新益京大路を観る。〔三月〕諫争無視で伊勢・志摩方面に巡幸。〔四月〕藤原宮地で地鎮祭。〔閏五月〕詔「天智天皇に郭務悰贈呈の阿弥陀仏像上送」。〔九月〕班田大夫等を四畿内派遣。〔十一月〕新羅使の朝貢と新羅遣使帰国。〔年間〕吉野行幸の頻出、広瀬・竜田神の祭祀、仏教施策・天武天皇の政治路線を継承推進。(三)質疑等:①二月条の「三月三日」に関して、この時期は農繁期ではないとの重大な指摘の一方で、この日に耕作開始の祭礼があるとの話も。②三月条の「志摩国の百姓、男女八〇歳への稲束賜与」は、各地に残る「二倍年齢」伝統と「庚午年籍」の関係で大議論に発展。この問題で古賀達也氏に発表論文。なお、「稲束」に関する質疑も。③七月条等の「大赦」について、他天皇紀での出現状況を調べてみることに。④トピックの「昔」では、九州王朝との関連性を示す用例は確認できず。(解説・質疑六〇分)

お知らせ

【月例会・今後の予定】

●6月月例会

日時:6月28日(土)午後1時~5時

会場:佃区民館　洋室3号

(オンライン参加できます)

【第1部】

＊研究発表

発表者:尾関育三氏

テーマ:3世紀中国人が音写した倭語・倭地名について

＊懇談会　フリートーキング

【第2部】新保高之氏

＊勉強会　古田武彦論稿より

『盗まれた神話』その7

＊読書会　日本書紀を読む

『持統天皇紀』その7

●『和田家文書』研究会

日時:7月12日(土)午後2時~5時

会場:古田会HPでお知らせします。

(オンライン参加できます)

テーマ＊「陸奥話記」と『和田家文書』

＊『和田家文書』のブルハン神

発表者:菊地栄吾氏、安彦克己氏

＊『和田家文書』研究会は奇数月の第2土曜日に開催。(11月を除く)

●「東京古田会ニュース」原稿募集!

東京古田会では東京古田会ニュースへ掲載する論文・小論・古代史雑感などを募集しています。住所・氏名を必ず明記のうえ、500字から5,000字程度にまとめて、Eメールにて左記へお送りください。ただし、特定個人への中傷や古代史と無関係な場合は掲載をお断りすることがあります。予めご了承ください。また、他紙などへ既に投稿しているものとまったく同じ内容の原稿は原則として掲載できません。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。

(Eメールアドレス)
saitaka7078@yahoo.co.jp
川崎市　斎藤隆雄迄

●東京古田会HPにご意見お寄せ下さい。東京古田会HPは従来のものから新たに模様替えをしました。種々のお知らせやトピックスなど好評です。お気づきの点や、トピックス等がございましたら、ご意見お寄せ下さい。

【新入会員募集】

東京古田会は新規会員を常時募集しています。古田武彦や古代史に興味のある方、どうぞお気軽にお問合せ下さい。また、入会ご希望の方や、本会にご興味のある知人・友人の方をご紹介ください。入会希望の方は事務局に電話又はメールで住所・氏名等ご連絡ください。年会費は4千円になります。

●新年度会費納入のお願い

令和七年度(四月~来年三月)年会費(**四千円**)を会報と同送しております振込用紙でお手続して下さい。

振込用紙に住所・お名前・電話番号の明記をお願い致します。

すでに多くの会員の方に「会運営への支援金」のご協力を頂き、ありがとうございます。

●オンライン会議は「Teams」に変更

月例会や研究会のオンライン参加につきまして、従来の「スカイプシステム」が5月で廃止になります。

東京古田会は新たに「マイクロソフト社の**チームズ(Teams)**」を利用する事になりました。月例会や研究会のご案内メールで都度、参加アドレスをお送りしますので、**その日の案内メールからご参加ください。**